

【多芸は無芸】

「生まれつき器用で、芸という芸、何にでも手を出し、一応何でもうまくやりこなす、という人がある。しかし、やる事が多いために、力が分散されるので、すべてが中途半端になってしまい、特に傑出した芸を持たないものである」という意味の諺です。

確かに“何でも上手”というのは、何でもひと通りこなす、というだけであって、ほんとうに上手なものはないものです。「二兎を追う者は一兎をも得ず」という戒めがありますように、あれもこれもと手を出さずに、ただ一つの道を選んで、それに力を集中させる事が、成功への近道である、という事を教える諺といえましょう。

論語にも「君子は多ならんや」とあり、君子はいろいろな事ができる必要がないことを孔子が弟子の子貢に教えています。この事は教育上大いに重視されてよいことだ、と私は考えています。

ところが、今の学校教育を見て下さい。何でも一応できる事を重視していますでしょう。多芸・多能を要求しています。世の中では、絵だけ、音楽だけ特に抜き出していたら、それで十分なのに、学校教育ではそれを許しません。

国語も数学も理科も社会も、すべてが良くできるのがよいのです。世の中にはそういう多芸多能の人もいるでしょう。そしてそういう人も世の中にいた方がよいでしょう。

でも、あらゆる人にそれを求めても、それは不可能であり、たとえ可能であるにしてもそれは決して望ましい事ではない、と私は思います。前に述べたように、あれもこれもと手を出さずに、ただ一つの道をまっしぐらに進んだ方が、その能力を高め、世に役立つ事も大きかろうと思うからです。

この頃“落ちこぼれ”という言葉がよく使われます。何か一つつまずいても、それを“落ちこぼれた”と言うのです。それは断じて“落ちこぼれ”ではありません。落ちこぼれとは、何一つ取り柄のない人間の事です。一芸に秀でていたら、人間として申し分ない、と私は思います。何でも出来る人間こそ「多芸は無芸」で、落ちこぼれと言うべきです。

さて、芸の旧字体は藝ですが、本字は執で、この古い形は、人がしゃがんで本の手入れをしている形を表わして、今の“農芸”つまり人間として必要な“技能”を表わした字です。今では広く“学芸”“芸能”というように使われています。

多は、月の変形である夕を重ねた形で、“林”と同じ趣旨の会意字です。夕方を多く重ねる事から“おい”という意味を表わしています。

無は、ブという発音を示す𠂔(舞も同じ)と𠂔とで作られています。𠂔は、火の燃える形を表わしたもので、“煮・焦・煎・照・熱”などの字に使われています。“亡(ブ)”の仮借だと説かれています。が、「火で焼き尽して何もなくなってしまう」事と説いてよいでしょう。